

第 455 号

2020 年 12 月 27 日

土佐のわらべ

オーテピア高知図書館

子どもの本の読書会だより

《第 477 回（2020 年 12 月 10 日）子どもの本の読書会記録》 参加者：8 人 文書参加：1 人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア 4 階集会室

わたしのベストブック

今月の読書会は、いつものような課題図書はありません。「わたしのベストブック」をテーマに、参加者のみなさんが一番好きな児童書を一冊持ち寄って、時間の許す限り、その魅力を語り合いました。こどもの頃から好きだった一冊、大人になって出会った一冊、今だからこそ好きと言える一冊……など、みなさんが語るそれぞれの本の話にはドラマが満載。とても楽しい読書会になりました。

それでは、みなさんのベストブックと、語っていただいたエピソードを短くまとめてご紹介します。

『あしながおじさん』（ジーン・ウェブスター/作、谷口 由美子/訳 岩波書店）

…手紙形式の文体に引き込まれる。元気になるし、励まされるが、ハッとさせられる言葉もある。自分の人生の中で、この本のようなものの見方や、考え方を持っておきたいと思う。谷川俊太郎訳のほう（朝日出版社）も良かった。

『クロードアの秘密』（E.L. カニグズバーグ/作、松永 ふみ子/訳 岩波書店）

…カニグズバーグに出会ったのは衝撃だった。こどもの生活には必ず社会が反映されているということが分かる作品ばかり。この本は 1967 年に初版が出ているが、今読んでも全然古さを感じさせず、登場人物の気持ちを自分に引き付けて読める。

『おおきな木』（シェル・シルヴァスタイン/作、村上 春樹/訳 あすなろ書房）

…モーパッサンの長編小説『女の一生』では、自虐的な自己犠牲が描かれている。しかしこの『おおきな木』はモーパッサンの限界を超え、りんごの木の、愛のある優しい自己犠牲が表現されている。

『箱のなかの海』（樹川 さとみ/著 集英社）

…中学生の日常に、ちょっとした不思議なことが起こる。しかし原因は最後まで分からず、不思議は不思議として受け入れている所が良い。「大事件はなくても、工夫次第で日常を楽しむことができる」という思いになれる、優しい物語。

『長い長いお医者さんの話』（カレル・チャペック/著、中野 好夫/訳 岩波書店）

…チェコの作家によるお話集。こどもの頃、家にこの本があり、チェコの文化にあこがれながら読んでいた。イラストも魅力。内容には社会への皮肉もあるが、東欧文化は自分にとって異世界なので、おとぎ話として読むようにしている。

『なんでもただ会社』（ニコラ=ド=イルシグ/作、末松 米海子/訳 講談社）

…教師時代に読み聞かせをしていた本で、こどもから大人気だった。イタズラ電話が、何でもただで貰える会社に繋がってしまう。しかし最後が「ん」で終わる言葉のものを頼むと……。そんな世の中美味いことはないよ、というあとがきも好き。

『カドヤ食堂のなぞなぞ』（富安 陽子/さく、宮本 忠夫/え 新日本出版社）

…今の時代、深刻な本は心が疲れてしまうので、笑ってしまうような本を、と思い選んだ。昭和を連想させるような食堂が出てきて、懐かしい。絵もユニーク。読んで感動するわけではないが、笑うことで力になるようなお話。

『時をさまようタック』（ナタリー・バビット/作、小野 和子/訳 評論社）

…永遠の生命を持つ者の苦悩を通して、限りある生をきちんと生きる大切さを感じさせてくれるから、書庫で埃をかぶって忘れられている本だから、という理由で選んだ。物語の最後は、ホッとすると同時に切なくなった。

『おおかさんがおおかさんになった日』（長野 ヒデ子/さく 童心社）

…こどもの頃、母親によく読み聞かせをしてもらった絵本。当時は、自分の生誕時のことが描かれていると信じていた。大人になり読み返すと、号泣。この絵本を通して、自分が愛されて育ってきたという感覚が培われたのかもしれない。

次回 1 月 14 日（木）10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室

□『朔と新』いとう みく/著 講談社